

編集後記

第10号から2年経ってしまった。この間、新型コロナの流行に悩まされ、大学のオンライン化に対応する努力がたいへんだった。研究では、現地調査ができない。現地での実体験が大きな研究活力になっていたことを痛烈に理解させられた。

そんななか、第10号に序文の翻訳を載せた、李松『中国道教美術史 漢魏南北朝篇』（勉誠出版、2022年2月）の共訳、また『異文化社会の理解と表象研究』（専修大学出版局、2022年3月）の編著で中国ドキュメンタリーの研究を出せたのは幸運だった。

ドキュメンタリーは、映像人類学の重要な手法であり、道教・洞天研究でも活用すべきだ。それは理解していても、いかんせん長年の文献主義から抜け出すのは容易でない。現地で実習できないうらみもある。この点、本号では、二ノ宮聡氏によるパトリス・ファーバー（Patrice Fava）先生のドキュメンタリー『妙峰山廟会』の翻訳・解説を載せられた。二ノ宮氏は妙峰山を専門に調査研究する最適の研究者である。ファーバー氏については以前、三田村圭子氏が「中国宗教儀礼における映像人類学」（土屋編『映像の可能性を探る』所収、専修大学出版局、2018年）という画期的な論文で、『閩西客家游記』（1997年）と『韓信復仇記』（2005年）を軸に、中国の映像人類学におけるファーバー監督の特徴を論じたことがあり、二ノ宮氏もそれを参照している。こうした研究が増えるのはよろこばしい。同時に、作品を見られるようにしていくことも大切だ。本研究では、『妙峰山廟会』を2017年パリでの国際会議で上映した（二ノ宮氏がコメンテーターを担当）。この作品は二ノ宮訳で専修大学においても上映し、『閩西客家游記』は三田村訳で同大学において上映したことがある。なお、妙峰山の廟会については、イアン・ジョンソン（Ian Johnson、張彦）氏が廟会の運営者たちにインタビューしたルポがあり、『信仰の現代中国』（秋元由紀訳、白水社、2022年）にまとめられている。本書では、ファーバー氏のほか、ヴァンサン・ゴースール（Vincent Goossaert）氏や劉迅（Liu Xun）氏の研究が参照されている。

ドキュメンタリー研究について書いて紙幅がなくなったが、本号では、葛兆光先生が朝鮮半島と日本の道教受容の研究を再考した翻訳の後半を載せられた。葛兆光先生に謝意を表したい。佐藤厚氏の翻訳にかかる韓国の研究とあいまって、東アジアの文化における道教・洞天思想の受容と変容を考えるのに大いに役立つだろう。（MT）